

国境地帯（ボーダー）の人類学
- ラオス・カンボジアの国境地帯の現在：人類学からの考察 -

文学学院
西村 正雄

はじめに

筆者は、1980年代より、フィリピンにおけるフィールド調査を基礎にしながら、東南アジアの文化人類学的研究の従事してきた。このなかで、特に2つの中心的な研究テーマを追求してきた。一つは、文化変動の動態を明らかにする;第二がそれと関連して、伝統とは何かを考察することであった。この中で筆者が一貫して考えてきた理論的枠組みが、文化的適応の問題であった。近年の文化理論が文化の内的な構造とそれをきづくり価値の問題に集中してきたが、それと同時に、筆者が考えてきた問題は、生物体としての人間の限界と、そうした限界を持つ人間の生存のための様々な実践（知恵、技術を含む）を個別の文化で明らかにしながら、人々に生き様を明らかにしてゆくことであった。この意味で、生態的に最も多様性に富むと言われている東南アジアにおける人々の文化的適応のパターンを明らかにし、その多様性をまず知ることで、文化がいかに様々な外のシステムとの関係の中で変動し続けているのか知ることである。

今日、東南アジアは、自然環境、社会的環境ともに激しく変動しており、その変動の渦中にあるのが、今回述べるラオスとカンボジアと言える。そうしたサブシステムとしての文化が関わらざる得ない周りのシステムの変動が、どのように一文化サブシステムの変動をもたらしているのかを概観することを目的とする。

概観するにあたって、私に関わってきたもう一つの研究の焦点が関連してくる。1994年以来、ユネスコの世界遺産の仕事と関わってきた。主に文化人類学の立場からの世界遺産のマネジメントと、それに必要な知識の伝達作業であった。文化人類学のホリスティックアプローチは、世界遺産というとても大きな力（パワー）に直面しなければならない世界遺産を有する地元民にとってどのような維持管理のしかたがよいのかとって問題は、常に問いかけられなければならない問題である。しかし、過去多くの世界遺産登録において、また登録後、地元の人々の文化は踏みにじられてきた。その典型的なものが、地元民の強制的移住である。世界遺産を公園化するため、全く異なった環境をそこに作り出そうとしてきたのである。私は、ところを変えてラオス南部のチャンパサックの世界遺産登録に伴って、地元の人々の生活パターンがどのように変化してきたか述べてきた。この変動が近年加速度を増しているように思われる。それは、世界遺産登録による観光ビジネスの興隆と関係しているように思われる。ユネスコによれば、世界遺産登録後、平均して観光客は3倍になるという。

多くの場合、世界遺産は、その最初の趣旨を守るためではなく、それを手段としてビジネスを展開する方向に変化してきているようである。それに対する住民からの抵抗も世界各地で報告されており、またそれを先導するエージェントとしての政府、外国機関の役割も報告されている。こうした傾向の中で、チャンパサックも例外ではないことが、私どもの調査でわかってきている。チャンパサックでは、観光を他の県よりも強く観光を第一義的産業と位置づけ、県主導のもと、郡政府、村の単位にいたるまで、世界遺産を観光商品として大々的に売り出す傾向が見られる¹。このための、県の観光戦略に、隣のカンボジアのアンコールを訪れた観光客、タイにきた観光客をチャンパサックに招き入れる戦略を立てだしている。このことは、まさにラオス、特にチャンパサックのカンボジア、タイとの国境政策と密接に関連した問題なのである。

そこで、本論文においては、ラオスの、特にチャンパサック県の観光政策が、国境地帯の人々の生活への影響について集中して述べてゆく。

1. 国境地帯（ボーダー）の人類学

人類学が国境地帯に注目してきたのは、1980年代からでそれほど長い歴史があるわけではない。国境地帯への注目は、国家、民族とってテーマが人類学の中で中心的なってきたいわゆるポストコロニアルの人類学と関連している。そこでは、旧植民地の独立後の政治的、経済的状況の中で文化の問題を考えることから、国境を意識した人類学が生まれてきたといえる（。現代の現象として、国境を越えて人々が移動すること（例、移民、難民、出稼ぎなど）は日常茶飯事であり、もはやひとつの国、民族、集団をもって文化を語ることが出来なくなっていることが指摘されて久しい。このことも、国家とは何か、国家を定義する最も端的な地理的バウンダリーとは何か、そして文化のバウンダリーとは何かといった問題が人類学者の研究対象となってきたのである。

しかし、1980年代、1990年代における国境地帯の人類学的状況は、まだ、国家や民族を考える人類学的研究の副産物的なものだったといえる。国家、民族の人類学的研究は、1980年代から1990年代にかけてピークを迎えた。その中で、次の5つの特徴があった。

- 1) いわゆる世界システムの拡大にともなう国家間の格差の問題を問うもの。
- 2) 独立後のアフリカ等の諸国と旧植民地宗主国との関係を問うもの。
- 3) 世界システムにおける経済的動向、とくに国家内における民族間の対立、差別の問題を問うもの。
- 4) 国家のアイデンティティ、民族のアイデンティティについての問題を問うもの。
- 5) 国家、民族を越えた人の移動（移民、難民）に関する問題を問うもの。

¹ ラオス政府観光局発行の文書によると（Lao National Tourism Administration 2006:19）宿泊設備の数の点で、チャンパサックは、ヴィエンチャン、ルアン・パバンについて第3位となっている。2006年現在、ホテル、ゲストハウス合わせて1679となっている。2000年時に759であったことから、実に6年間に約2倍になっている。この急速な増加は、ヴィエンチャン、サヴァナケットを除いて、他に類を見ないものである。

このうち、国家、民族の枠を超えて人々が移動する現象は、その後のグローバル化の研究の中に取り込まれつつ、より大きな設定の中で語られるようになる。1990年代の有名なアパデュライの研究のように（Appadurai 1996）、研究の中心がグローバル化の影響、グローバル化そのものの存在定義に移る中で、現象としての人、モノ（金融）、アイデア、情報の流れを全体論的に見てゆく傾向に変わってゆく。

こうしたグローバリゼーションと一言でくくられてきた現象は、実際には極めて多くの多様性を含み、一見するとまるでランダムな要素のランダムな動きの中で、それをそのまま放置すると国家の存亡にかかりかねないことを認識している国家行政機関（政府）は、当然のことながらその動きに規制をかけてくる。普段国家の中心にいる時、その規制は、はっきりと目に見える形で捉えにくい。しかし、それがはっきり見える地帯がある。それが、国家の周辺部であると考えられている（Asad 2004; Das and Poole 2004）。周辺部とは、国境地帯、また国家の中での紛争地帯、民族間のボーダーを含むところである（Das and Poole eds. 2004）。こうした地帯では、国家は、そのパワーを示す意味で、規制を文字通り杓子定規的にあてはめ、国家の統制を示そうとしてくる。このため、国境では厳しい入国管理があり、紛争地帯では数々のチェックポイントが置かれ検問がなされてくる（Jeganathan 2004）。さらに民族のボーダーでは、言語教育など教育の面からの規制がかけられてくる。

一方、国家の規制とは異なった動きをするものにとって、国家の周辺部はまた活動の格好の空間を提供している。

2．ラオス国境の現在: ラオスの国境政策

ラオスは北で中華人民共和国とミャンマー、西はタイ、東はベトナム、そして南はカンボジアと国境を接しており、まさに国全体が国境と直接関わる国である。このため、国境地帯における活動は、とりわけ重要であった。特に、海に面していないラオスにとって、国境をはさんだ経済活動（ボーダートレード）は、国境と接する社会の、さらには国全体の死活問題と言ってよいほど大切な役割を担ってきた（Leebouapao, et al. 2006; 天川編 2004; 天川、山田編 2005; 石田編 2005; カムペーン 2003; 西沢他 2003）。

3．事例研究：ラオス南部とカンボジア北部の国境地帯：ラオス、チャンパサックとカンボジア、スタントレンの国境地帯

A．チャンパサックの地理的背景と観光資源としての文化遺産

チャンパサック県は、ラオス南部の4つの県（サラワン、セコン、チャンパサック、アッタプー）の一つである。西はタイと、南はカンボジアと国境を接している（図1）。このうち、隣国のタイとの国境は、同じく隣国ベトナムとの国境と並んで長い国境線を共有する。タイとの国境のほとんどは、メコン川によって形成されている。しかし、チャンパサック県は、その県内をメコン川が流れ、タイとの国境線は山塊によって作られている。その結果、チャンパサック県は、その山塊とメコン川に囲まれた一種孤立した土地となって

おり、そこにアクセスするにあたって従来メコン川を渡るか、タイ側から山塊の裾野をめぐる道路をたどる必要があり、交通の便の点で一種「不便」な所であった。しかしながら、この不便さがこの地域の遺産をそれがつくられ、そして廃棄されて後もほとんど大きな攪乱もなく、きわめて良好な保存状態のまま保ち続けて要因ともなっているといえる。

(ここに図1を挿入する)

メコン川がさらに南下してカンボジアに入る。カンボジアと南部は国境を接している。カンボジアとの国境は、メコン川が断層を流れるため、流れの急な滝となっており、今日コーン滝、また拡大したメコン川内に多くの岩礁、小島があり、サウザンド・アイランドと呼ばれ、風光明媚な観光地となってきた(図2、3)。しかし、それは同時にメコン川が交通の手段としては、直接カンボジアからラオスまで使うことができなかったことを意味しており、後で述べるように、この地にかつてクメールの帝国(アンコール)の領土の一部となった時でさえ、アンコール帝国とこの地との行き来が盛んに行われたが、その手段は陸路が重要であったことが推測されるのである。

(ここに図2、3を挿入する)

この一種孤立した土地は、タイとの国境を作る山塊の裾野が広がってメコン川にいたるまでの、海拔約100mからそれ以下の狭い沖積平野でできている。沖積平野は、山塊からメコン川に流れ込む小河川が東西に流れている。これらの小河川は、乾季(十二月から四月)には、ほとんど降雨がないため、干上がる。一方雨季(五月から十一月)には洪水を起こす。この規則的な洪水は、平野部に泥土の堆積をもたらし、比較的肥沃な土壌の分布を平野一帯にもたらしてきた。とくに、山沿いでは良好な土壌と雨水により、雨水頼りの水稲耕作を可能にしてきた。ラオス全土が比較的土壌の質の点で恵まれない中、この地はその中では、比較的水稲耕作ができる土地として知られてきたのは、この定期的な洪水をどのようにコントロールするかが、この地に居をかまえた人々の長年の活動の中心であった。乾季にはほとんど雨が降らず、一方雨季に多大の降雨によって洪水をもたらす気候条件は、そのサイクルとそれをいかにコントロールするかが、そこでの農耕民にとって最も重要であった。

最近の研究によれば、この地における洪水は、それを排水する高度な技術と知識が必要であり、この地に都市を築いた人々は、技術と知識を持ち合わせていた様子がうかがえる(Cucarzi et al. 1992; Pichard 1997)。アンコールのあるシエムリアップは歴代の王の仕事として、網の目のような灌漑水路が建設されたが、その大きな目的は、水の供給にあった(Groslier 1979; Rooney 1994)。一方、この場所でもまた、灌漑水路の建設の痕跡があるが、それは排水を目的としたものであったと思われる(Cucarzi et al. 1992)。この排水こそ、こ

の地の人々の知識と技術が結集したものと考えられる。

チャンパサック平野の西に存在する山塊のうち最も高い山が、標高 1416mのカオ山(Phu Kao)である(図1)。カオ山は、チャンパサック平野のどの位置からも見ることができると同時に、メコン川からもよく見ることができる。この山は、独特の形をしていることで知られている。その山頂に岩が屹立しており、遠望では、まるで自然のリング²がそこにあるように見える。そのため、それを頂に持つ山全体が神の宿る山としてみられ、これがカオ山を聖地として信仰する理由となったと考えられている(Barth 1902)。実際、シェスタブラ古代都市で発見された碑文によれば、「男がリングバルバタ(Linga Barbata)(カオ山のこと)に導かれて都市(シェスタブラ)を造った」と述べている(Jacques 1962, 1986; Cucarzi and Zolese 1997; Jacques 1962, 1986; Jacob 1974; Lintingre 1974)。カオ山の存在こそ、この地域に人々が集まり、都市を確立し、聖なる山に見守られて毎日の生活を確立し、聖なる山(カオ山)への信仰のため、寺院(ワット・プー)を建立したと考えられている(Barth 1902; Cucarzi and Zolese 1997; Dumarçay 1988; Finot 1902; Government of Lao PDR and UNESCO 2001; Jacob 1974; Jacques, 1962, 1986; Lintingre 1974; Nishimura 1998c)。

B . チャンパサックにおける遺産の歴史的意義

このチャンパサック平野とその山塊は、先アンコール時代(ca 3-9C AD)、アンコール時代(ca. 9-13C AD)、そして後アンコール時代(ca 13-19C AD)の遺産を集中的に含む場所として知られている。特に、先アンコール期からアンコール期につくられたワット・プー(Vat Phou)と呼ばれる石造寺院コンプレックス(Barth 1902; Dumarçay 1988; Finot 1902; Government of Lao PDR and UNESCO 2001; Jacob 1974; Jacques, 1962, 1986; Lintingre 1974; Nishimura 1998c; Pichard 1997)、また、平野にほぼ作られた時代もまま埋蔵されている「古代都市」(シェスタブラ)と呼ばれる都市遺跡が存在している(Cucarzi et al. 1992; Government of Lao PDR and UNESCO 2001)。これらの遺跡は、ごく小規模な調査を除いてほとんど調査されずにそのまま残存してきた。

現在まで調査をしてきたフランス隊、イタリア隊によると、ワット・プーの周辺に残る石造建造物の痕跡は、ワット・プーとは異なった様式をしめしており、その作り手は未だ不明である(Lintingre 1974; Parmentier 1914)。ワット・プー寺院コンプレックスは、この一帯で一番大きな石造建造物である。この建造物は、今日砂岩とラテライトのブロックで構築されているが、フランス隊の調査によると、そうした石造の建物がつられる以前、レンガ造りの建物が存在し、さらにそれに先立って木製の建物の存在があったことを示唆している(Dagnes 1988; Dumarçay 1988; Government of Lao PDR and UNESCO 2001)。このことは、ワット・プー寺院コンプレックス自体も、その最初の造り手は、アンコールを構築したクメール人とは異なることを示唆している(Lintingre 1974)。時代的に、この寺院コンプレックスから出土する最古の遺物が、5世紀から7世紀と示唆されており、明らか

にカンボジアのアンコールの国家形成以前にこの建物が作られ始めたことを示唆している (Jacob 1974; Jacques 1962, 1986; Lintingre 1974; Nishimura 1997; 1998a)。

さらに、古代都市遺跡は、その中の建物の多くがレンガで造られていたことが知られている。一部土台石に砂岩が使用されたが、ほとんどがレンガで造られていたと思われる。その最下層のレンガの年代測定から、都市の形成に開始は5世紀ごろからそれ以前と推定されている (Cucarzi, et al. 1992; Nishimura 1997, 1998a; Nishimura and Sikhaxay 1998)。このことから、この地に人々が集まり、都市を形成し、また宗教寺院を建立し始めるのが、5世紀からそれ以前と考えられているのである。このことは、この地が、社会 - 経済的な意味で、また宗教 - 観念的な意味で重要な場所であったことを示している (Cucaruzi and Zolese 1997; Cucaruci, et al. 1992; Nishimura and Sikhaxay 1998; 大坪 2004)。

III . チャンパスック世界遺産登録後の動き - 観光開発へ急速な動き -

2001年12月にチャンパスックは、世界遺産委員会で世界遺産に登録された。この登録に先立って、日本政府は、ODAの新たな種類として、文化無償援助を設立していた。この援助先に、ラオスを考え始めていた。このためのヒヤリングと調査、ラオス中央政府関係者との折衝が始まっていた。

2002年、その前年に世界遺産になったチャンパスックは、無償援助の対象となった。同年、正式に日本政府は援助を決定し、援助の準備に入った。その内容は、ワット・プー境内内の排水路の整備、遺物貯蔵施設に建設、旧王朝時代の建物の撤去及び、ワット・プー入り口周辺の整備であった。実際の日本からの専門家の派遣を前に、地元ラオス政府のやるべき仕事として、そうした工事のための資材置き場と、これから造る貯蔵施設の建設用地の整備が課せられた。このプロジェクトは、日本政府とラオス政府との二国間援助の形態をとっているため、名目的なプロジェクトの契約相手は、ヴィエンチャンのラオス中央政府であった。しかし、プロジェクトの実際の推進者は、地元の県と郡レベルの政府関係者であった。このことが後に、チャンパスックのランドスケープの大きな変更をもたらす要因となったと思われる。

もともと、チャンパスックは、地域主義の強いところと認識され、ユネスコの世界遺産プロジェクトの推進においても県レベル、郡レベルの政府は、独自の主張をしてきた (Nishimura 2004a; Nishimura and Sikhaxay 1998)。ユネスコの世界遺産登録に関して、登録条件を提示されたが、それに対する基本的な合意はあったものの、基本的に自らの意見を取り下げたわけではなかった。その基本的なポイントは次のようなものであった。

- (1) 世界遺産登録と、その後の開発に関して県レベル、郡レベルの意見をできるだけ尊重する。
- (2) 保存、修復に関するプランに、県レベル、郡レベルも参加する。
- (3) 保存、修復に関する事業に、県レベル、郡レベルの人員を使う (Nishimura 2004a)。

この考え方はしばしばユネスコと中央政府の考え方と異なるものがあった。中央政府は、対外的な窓口になっていることから、ユネスコの考え方に対する理解を示し、その意向をラオスの人々へ翻訳し、伝達する役割を果たしてきた。しかし一方でこの考え方が、地方レベルの考え方と大きく異なることを認識してきた。このため、もうひとつの役割は、地方レベルの意見をユネスコの述べる規定の中に入れること、すなわちユネスコの規定が厳しくならないように調整することであった。この作業の中で、明らかになってきたことは、中央政府がきわめて地方レベルの政府に配慮を示そうとしてきたことであった。NIMCCの会議で、中央政府の代表によってしばしば述べられた言葉は、「チャンパサックは伝統的に地域意識の強い所」というものであった(Nishimura and Sikhaxay 1998)。

この「強い地域主義」が、世界遺産登録後現れてきた。世界遺産登録の最もポイントとなる点は、地域内に遺産を守り、修復してゆくためのゾーニングが設定されたことである。ゾーンの意味の独自の拡大解釈が、地方政府の人々によってなされたように思われる。

ゾーニングは、三つの分類でなされた。第一は、研究調査すべきゾーンとして、最も重要な地域で、もっとも厳しい規制が課せられた地域である。ワット・プーとその周辺地域、古代都市(シェスタプラ)地域、クメールの街道跡の一部がこのゾーンとして設定された。この地域では、あらゆる建物等の建築、道路建設等が基本的に禁止されることとなった。

一方、第二のゾーンは、この地域の自然を保護する目的で設定されたゾーンである。このゾーンには、カオ山を中心とする山塊すべて、メコン川の一部が含まれる。特にカオ山を中心とする山塊全てが含まれていることは非常に重要な意味がある。チャンパサックに遺産が造られた意味に関する指定となっている。この地域に遺産がつけられたのは、本文中、先に述べたようにカオ山頂にそそり立つ大きな岩をリングとみなし、その結果カオ山を神の宿る聖なる山と見なしたため考えられる。このランドスケープ(景観)こそ、この地に人々が集まり、生活を営んできた源と考えられるのである。このため、チャンパサックに関しては、個々の遺跡の保存もさることながら、それらの存在する根源的な源である景観の保存が重要となってくるのである。このため、景観を作る重要な要素である山塊すべて、メコン川の一部がゾーン指定されて、保存されてきたのである。

第三のゾーンは、第一、第二のゾーンを含みつつ、より広範な地域にあてられている。この地域は、チャンパサックの人々のほとんどが暮らしている場所である。このため規制は最もゆるやかなものとなっている。規制のこのゾーンの基本的なコンセプトは、住民の大部分を占める農民の現生活を維持継続することを目的としている。このため、この部分の規制に関しては、事前の文化人類学的調査の結果が生かされている。例えば、村の人々の家や寺院の高さの調査から、7mの高さ以上の建物がないことから、基本的に7mの高さ制限がこのゾーンにかけられている(Government of Lao PDR and UNESCO 2001)。

こうしたゾーニングは、開発に関して独自の考えを持ってきた県、郡という地方レベルの政府機関にとって、その考えと対立するものであった。このため、地方レベルの行政担当者は、一応ユネスコと中央政府の考え方に大枠で同意を示しながらも、細部の点で自分

たちの考え方を示そうとした。考えを考えたとしてとどめるのではなく、実際の行動の中で示してきた。先に述べたように、文化無償援助の実際の執行は、地方レベルにまかされていたため、この細部の段階で地方レベルの考え方が大いに反映されることとなった。

2002年5月、県政府と郡政府は、貯蔵庫建設用地を整備することと、排水路等を建設する機械置き場の整備に着手した。この中で、地方レベルの政府関係者は、必要最低限の場所という、日本政府側の意向を拡大解釈した。彼らは、かねてから、ワット・プー遺跡周辺を、「遺跡公園」化したと望んでいた(Nishimura and Sikhaxay 1998)。この機会をとらえて、その実行にかかった。用地整備を拡大解釈し、広大な土地をその目的に必要として接收した。その結果、ワット・プーに隣接する、ノンサ村の100戸以上の強制移住させられることになった。移住させられた人々は、近くの土地を与えられ、そこに新しい家を作り生活を始めた。多くの水田も接收された結果、その影響を受けた住民は、代わりの耕作用の土地を与えられたが、土壌の質の点で劣るものであった。ただし、ワット・プーへいたる幹線道路沿いに家を建てたものは、新たなビジネスに入った。小さな食べもの屋、小さな雑貨店などである。その後のインタビューでこうした店の人々は、収入が以前より増えたことから、世界遺産後の変化に肯定的な意見をもっている。

この結果、強制的に接收されたワット・プー周辺はゲートができると同時に、フェンスで囲まれ、整備された。しかし、かつて村人が、農作業などのために、自由に使用していたバライからの水の供給がなくなり、この結果、ノンサ村に属し、ワット・プーに隣接する多くの水田が耕作困難なものとなった。

こうした強制移住させられた世帯に対しては、補償がなされた。その額に関しては、公式には発表されたものはない。しかし、インタビューで、移動した人々のインタビューで、政府は、一世帯あたり、約700万キップスを提示した模様である。村人はこの額については、不満を抱くものも多い。多くの農民が、かつて生活していた場がフェンスで入れなくなったことを不満をいんでいる。この結果、しばしばフェンスが破られ、そこに元のように自由に出入りしたという意思表示が見られる。ささやかな抵抗が見られることについて、地方政府関係者は、法律の説明をし、それを食い止めようとしている。しかし、実際に行方者の逮捕などの強制的な手段は今のところとっていない。破られればすぐにフェンスの修理をするといった対策にとどまっている。

このランドスケープの変更は、まだ続いている。地方政府は、さらにワット・プーへのアクセスの便をよくするため、パクセからそこに続く新しい道路の建設を計画中である。また、メコン川沿岸の景色を整備するため、それに沿った村の移動を考えている。このように、地方レベルの政府の段階で、遺産の「公園化」が進んでいる。これは、ユネスコが考えてきた、ラオスの人々による遺産の保護が、異なって解釈されていることを示している。そこで、その点を踏まえ、どのような違いが見られるのか、比較検討してみたいと思う。

5. ラオスから見たカンボジア国境

ラオスにおいて、観光は今や第一義的な産業になり、これに対する期待は、中央、地方、そして一般の人々のレベルまで浸透しており、期待はますます増大している。この中で、特に南部のチャンパサックは、上で述べたように中央政府の観光局以上に、極めて熱心に観光開発に取り組んできたのである。チャンパサックは独自に観光開発について見解を持っているようである。

チャンパサック県の観光局長によると（2005年8月及び12月のインタビュー）県政府として確固とした戦略のもと、それを実行しようとしている。それらは次のように集約される。

- 1) カンボジア、ラオス、タイの国境地帯を「黄金の国境地帯」と称し、カンボジアのアンコール遺跡を訪れる観光客をチャンパサックに誘致する。
- 2) タイからの陸路を整備し、タイの観光客がチャンパサックに来やすい、道路整備等を行なう。
- 3) カンボジア、タイとの国境の通過をより容易にする。そのため、入国手続きの簡素化をはかり、短期観光のための滞在者に対しては、ビザ無しで入国できる措置をとる。陸路のチェックポイントばかりでなく、パクセの空港を国際空港とし、そこでパスポートコントロールができるようにする。
- 4) チャンパサックの文化的付加価値をつけるため、少数民族村、文化村、またワット・プー世界遺産地域内の一層の整備をはかる。そのために、メコン川沿いにプロムナードやサイクリングロードのなどを造る。さらに文化村などで、チャンパサックの織物、踊りなどを見せる。メコン川でボートレースなどの行事を見せる。
- 5) カンボジアとの国境地帯を形作る急流、滝などの景観（図2、3）またその生息する淡水産イルカなどの生物の保護を合わせて一体の自然をユネスコ世界遺産として登録し、観光開発を行う。こうしてカンボジアのアンコールからワット・プーまで切れ目無く続く観光のベルト地帯をつくる。

一方、住民は社会主義体制下で、自らの意見をもつというよりほとんどすべて政府関係者の意見に追随する形をとっていった。われわれの世界遺産地域内における3つの村：ノンサ村、チャンパサック・タウン、パピン村いずれにおいても、住民は世界遺産に対して肯定的な意見を述べ、それを利用した観光開発は1) 収入が増える；2) チャンパサックを多くの人に知ってもらう機会が増える、の2点で常に積極的に賛意を述べてきた（2005、2006 チャンパサック郡における住民へのインタビュー）。

このことから、住民がさして批判的な自己の意見を述べないまま、チャンパサックは一見すると一丸となって観光開発を益々盛んにする方向で進んでいるように思われる。すでに、チャンパサック県政府の幾つかのプランについては、ADB（アジア開発銀行）などの

資金援助を受け実行段階に移している。2006年から2007年にかけて、チャンパサックには、メコン川の中洲であるドンデン島に、その砂浜を利用しつつフランス的テイストをもったコテージの建ち並ぶ「文化村」が出来つつあり、さらにメコン川対岸で世界遺産地域内にあり、ワット・プーとならんでもう一つの大きな遺跡であるトモ（Tomo）遺跡周辺をめぐるサイクリングロードの建設が出来つつある。急激に変化しているランドスケープは、チャンパサックの人々の期待の大きさをそのまま反映しているように思えるのである。

この観光開発は、上で述べた政府関係者のこれらラオス南部が国境を接する国々との連携のもと、それらの国々からの観光客（必ずしもその国の人々ばかりではなく、それらの国々をめぐるラオスに来る国際観光客を含む）をチャンパサックに誘導しようとする意図のもとに行なわれてきている。この実行は、当然ラオスの中央政府が、ASEANの一員として対外的に約束してきたASEAN域内でのモノ・人の移動の自由化の路線にそうものであるものの、その実行のやり方はそれぞれ国境を接する県によって対応の仕方に多様性が見られる。その中で、チャンパサックのとりわけ積極的な対応が目立つのである(Lao National Tourism Administration 2006; 2005, 2006 チャンパサック県政府観光局長とのインタビュー)。

ラオスにおける観光開発は、タイにおける観光産業の興隆を見ながら、明確に大統領令のような形でタイをモデルとはしないまでも、タイ型の観光開発を目指していることははっきりしている。チャンパサック県政府観光局の人々は頻繁にタイに赴き、観光開発の視察を行っており(2004年チャンパサック県観光局関係者とのインタビュー)いわゆる「イメージング・タイランド」方式の、「文化」を発見させて、それを全面的に売り出すやり方を取り始めている。このため、ここ数年、特に世界遺産登録後、チャンパサックでは、急にチャンパサック周辺のいわゆる「少数民族」を観光資源化する方向に動き出している。もともと周辺化されてきた人々に、新たな「産業的」価値を見出している。このため、毎年2月に行なわれるワット・プー・フェスティバルでは、少数民族の衣装をまとい、道具をもった人々のパレードが盛んに行なわれるようになってきた。

6. カンボジアから見たラオス国境

筆者は、国境に関する見解を比較するため、カンボジアとラオスの国境であるストウン・トレン州においてフィールド調査を開始した。まだ初期の予備調査の段階のため、期間はそれぞれ2006年と2007年8月から9月にかけてそれぞれ約2週間づつ行なった。調査内容は、国境を接する町、州都のストウン・トレン(Stung Treng)とウ・スヴァイ村(Ou Svay)にて、住民へのインタビュー調査の形をとった。

調査では、2つの点を明らかにすることに集中した。一つは、住民の生活調査；もう一つが、最近における生活の変化である。ストウン・トレンの町でゲストハウスを営むA家族は、そこに代々住み着いており、以前はレストラン、雑貨商などを営んできたが、近年国境が開き、ラオスへの玄関口として重要性を増し、観光客が増えることを予想し、その期

待感からゲストハウス経営に乗り出し始めた。もともと家族は多く、家・敷地などの財産は妻方のもので続いてきたが、妻方の親族、夫方の親族を含めてその世帯内での人口は増えつつある。ストウン・トレンはメコン川に面しているが、プノンペンから続く道がさらにラオス側に延びてゆく計画があり、そのためメコン川にかかる橋が建設途上となっている。しかし、工事が途中で止まっており、そのことについて、A家族の全員が、ラオスを非難している。すなわち、「ラオスは、開発に全く関心がなく、それどころかカンボジアからの物資・人が流れ込むことを阻止するため、橋を造らせず、また道路もメコン川の対岸から舗装もされず悪くなる」と述べている。この意見は、A家族に特有の考え方ではなく、少なくともストウン・トレンの町の住民が一般的に持っている感情であるように思われる。川の船着場での船頭、車の運転手、船の乗客の意見も同じであった。

要するに、カンボジアの人々にとって、ラオスは開発に関心のない、後ろ向きの発展性のない国として、映っているようである。しかし興味深いことに、この国境を越えて、実はラオスの人々とカンボジアの人々は頻繁に行き来している様子も見られるのである。機会があるところではない。一方、後で述べるように、対岸のチャンパサックはいま一種の経済発展を目指して突き進んでおり、その県都のパクセは、「ブーミングタウン」の様相さえ示してきている。このため、ストウン・トレンの住民、さらにその周辺の住民はラオスへ出稼ぎに出る現象が出てきている。このことは、しかしカンボジアの住民のラオス観を変えるにはいたっていない。

筆者は、このラオス観が村のレベルでも見られるのかを調べるため、メコン川を渡ったところに存在する村、ウ・スヴァイ村において調査を行なった。ウ・スヴァイ村では、本村から少しはなれた国境線上に店を持つ住民B家族と、ウ・スヴァイ村本村に代々暮らすC家族において、インタビュー調査を行った。B家族は、40代の夫と30代の妻、子ども3人の核家族で暮らしている。ここでは夫はカンボジア人、妻はラオ人であった。一般的に、カンボジア、ラオスとも結婚後は妻方居住となる場合が多いが、国境地帯ではその慣習をどおり行かない事情がある。ラオス・カンボジアの国境は、ラオス内戦時は、ラオスからの難民がカンボジアに逃れる場所となり、そのためストウン・トレン州内にはラオス人のコミュニティができていた（例、Evans 1990, 1996; 上東 1990; 菊池 2003; Stuart-Fox 1997）。こうしたコミュニティ通しの通婚も見られる（例、Leebouapao 2006）。

一方、カンボジアのポル・ポト時代、その圧制を逃れてカンボジア側から人々がラオス側に難民として逃れてきた(Chandler 1996; Ebihara, et al. 1994)。さらに、ポル・ポト派の兵士がしばしばラオス側に侵入したと報告されている（2000年チャンパサック県政府関係者へのインタビュー）。こうした状況で、慣習はそのまま貫かれていない。

B家族は、国境線上の村で、雑貨屋、みやげ物屋を営み、カンボジアとラオス、両方からの訪問者を相手に商売を営んでいる。店頭にならぶ物資は、カンボジアとラオス両方からのものである。例えば、ラオスのもち米を入れるバスケット、また、ビール。カンボジアの織物、タイのドリンク、またプラスチック製品などである（図 4、5、6、7、8、9）。

親戚関係など個人的なコネクションを生かして信用取引をして物を仕入れる、昔から続いていたボーダー貿易のやり方がここで見られるようである（例、Leebouapao, et al. 2006; 天川編 2004）。B 家族の主人は、物資の仕入れは、自分の親族とその知り合い、また妻方の親族とその知り合いが関わると述べている（2006 年ウ・スヴァイ村でのインタビュー）。

（ここに図 4、5、6、7、8、9 を挿入する）

ウ・スヴァイ村本村における C 家族は代々そこに暮らす古い家族である（図 10、11、12、13）。家族は付近に田畑をもち、農耕を行ってきた。しかし、それ以上に、ボーダーに住むことを生かし、家族で交易に関わってきた。家族をカンボジアのプノンペンへ、ラオスのパクセ、ヴィエンチャンへと派遣し、物ばかりでなく広く情報を収集してきた。この家族はラオスが今後国境政策を変更し、カンボジアとラオスの国境が次第に開放されてゆく事を知っていた。そのための準備もかねて、いままでもバックパッカーに部屋を貸して泊めてきたが、これからゲストハウス経営を広げてゆく事を述べている（2006 年ウ・スヴァイ村におけるインタビュー）。今回村全体を通じた家計調査をしていないため、この家族の収入の正確な比較研究はできないが、家の大きさ（約 6 部屋）、持つ土地の大きさ（約 4 ha）からして豊かな家族といえる。この家族にとって、ラオスは「稼ぐ場としてよい場所」（2006 年ウ・スヴァイ村におけるインタビュー）だという。家族のメンバーは常に、ラオス、カンボジアの両方の国で活動しているのである。

（ここに図 10、11、12、13 を挿入する）

7. 政治的制度としてのバウンダリー、文化的バウンダリー

ラオスは、1986 年以降のチンタナカンマイ政策、そして 1997 年の ASEAN のメンバー国になることにより、東南アジアのコミュニティの一員としての役割をはたす義務を持ちながら、若干の振りもどしをしつつも着実に市場経済化へ向けて進んできた（天川編 2004；天川、山田編 2005）。この中で、最も重要なのが、こうした自由化政策以前から重要であった国境地帯でのいわゆる「ボーダー交易」の問題であった。チンタナカンマイ政策によって、ラオス政府は次の 7 つの政策変更を行ってきた： 価格の自由化； 国営企業改革； 財政改革； 貿易改革 - 関税自由化を含む； 交換レート改革； 銀行・財政部門改革； 外資の投資促進（Leebouapao, et al. 2006:83）。

この流れを受けて、伝統的にそこに存在していたボーダー交易も、大きく影響を受けてきた。特に 2004 年、ラオス政府はボーダーポイントでの物、人の流れをよりスムーズにするため、貿易関連サービスの円滑化； 輸出入ライセンスの廃止の方針を打ち出してきた（Leebouapao, et al. 2006:83）。この効果はすぐ現れる。ラオス国内の物資の種類、量が格段に増してきたのである。更に、ビザなしで入国できるチェックポイントを増やす事で、

人の流れもよりよくなっている。カンボジアとの国境もこの流れに乗り、制度としての障壁は低くなりつつある。

しかしながら、一方、筆者の調査は、別の障壁が高くなりつつあるように思われる。先に述べたように、ラオス政府、そして特にチャンパサック県政府の戦略は、観光産業の促進であり、制度的バウンダリーをなくすことで、カンボジア等からチャンパサックへ観光客を招きいれようとしているのである。そして、チャンパサックの遺産、少数民族の文化を観光のための資源と見做し、それらを全面的に売り出す方向に進んできている。このことは、チャンパサックとして、多との違いを明確にする必要性に迫られてきていることを意味している。チャンパサックは、本来、考古学的資料をみても、また歴史的資料を見てもクメール文化の影響を受けた土地として、はっきりと線で分ける必要があるとは限らないように思われる（例、Berval ed. 1959; Bruguier 2005; EFEO 2005; Finot 1902; Jacob 1974; Jacques 1962, 1986; Lintingre 1974; Nishimura and Phakhanxay 1998; UNESCO 1987, UNESCO/UNDP 1991）。しかし、観光的付加価値をつけるため、あえて違いを強調する必要が出てきているようである。これが、ラオスのみに存在する少数民族をあえて表に出すこと、ラオス的と「信じられる」音楽、織物、色合いなどを合えて強調する事になってきている。すなわち今ボーダー地帯で起こりつつあるのは、制度的バウンダリーが低くなるのと相反して、「違い探し」であり、そうすることで文化的バウンダリーが高められつつあるように思われる（例、Bouapao 2005; 神澤 2003; カムボーン 2003; カムペン 2003; 小山 2005）。

8. まとめ：ボーダーの人類学：違いをつけること - 非合理性の日常

今回の短期における簡単なフィールド調査を通して見えてくるものは、国境地帯は、従来考えられてきた周辺化されたところではなく、まさに社会 - 政治的な、また社会 - 経済的なあらゆる活動が集約し、具現化されているところで、むしろ中心的な様相を示しているというものであった。すでに、何人かの研究者によって述べられてきたように、国境地帯こそ、最もその国の政策が見えやすい場所であり、またその政策が駆け引きなしで実行されている所のように思われる(e.g., Asad 2004)。

一方、そこに暮らす住民たちも、それを最もよく理解し、あるときは賛成して従い、あるときは反発しつつ、それをかいくぐる方策を身につけている。そこでは、その国の他の部分、例えば都市部などでは、見過ごされるような事柄があからさまに取り上げられ、規制の対象となってきた。社会主義の体制のラオスでは、その状況は過酷である。近年国境を開放政策をとっているラオス政府が、またいつ急にそれを変更するのか予想するのは困難である。こうした不測の状況への適応が、まさにボーダーで生きる人々の生活の仕方なのである。

いま、制度としてのバウンダリーが低くなり、一見するとボーダー地帯に住む人々にとってより良い環境ができつつあるように思われる。しかし、ラオス・カンボジアの国境地

帯を見る限り、それに変わって高まりつつ文化的バウンダリーによって、今後上からのアイデンティティの選択に迫られる可能性もある。自己の所属する文化の問題が、遠からず起こってくるものと思われる。予想されるそうした事態への適応として、国境地帯の家族は、家族のメンバーを両方の国に送ることにより、どちらへも所属を変えることができるよう、準備しているのである。

参考文献

< 欧文文献 >

Abram, S. and J. Waldren eds.

1998 *Anthropological Perspectives on Local Development*. London: Routledge.

Appadurai, A.

1996 *Modernity at Large*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Asad, T.

2004 "Where are the Margins of the State?". In Das, V. and D. Poole eds., *Anthropology in the Margins of the State*. Santa Fe: School of American Research Press. Pp. 279-288.

Berval, R. de ed.

1959 *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie.

Bouapao, L.

2005 *Rural Development in Lao PDR*. Chiang Mai: Chiang Mai University.

Bruguier, B.

2005 *Programme d'inventaire cartographique*. EFEO Rapport (Novembre 2005). Paris: EFEO.

Chandler, D.

1996 *Facing the Cambodian Past*. Chiang Mai: Silkworm Books.

Cucarzi, M, A. Rivolta, and P. Zolese

- 1992 Preliminary Report on Geoarchaeological Investigation in the Old City.
PRAL 1992 Activity Report. (Unpublished.)

Cucarzi, M. A. and P. Zolese

- 1997 An Attempt to Inventory Khmer Monumental Remains Through
Geomagnetic Modelling: the Ancient City of Wat Phu. *BEFEO* 1997.

Cuéllar, J. P. de ed.,

- 1996 *Our Creative Diversity*. Paris: UNESCO.

Dagens, B.

- 1988 Preservation of Wat Phu. UNDP/LAO/86/006 Assignment Report
Submitted to UNDP and UNESCO. (Unpublished).

Das, V. and D. Poole eds.

- 2004 *Anthropology in the Margins of the State*. Santa Fe : School of
American Research Press.

Das, V. And D. Poole

- 2004 « State and Its Margins : Comparative Ethnographies. » In Das. V.
amd D. Poole eds., *Anthropology in the Margins of the State*. Santa
Fe : School of American Research Press. Pp. 3-33.

Dumarçay, J.

- 1988 Projet Pour La Restauration Du Temple de Vat Phu. Mission Report
Submitted to UNDP and UNESCO . (Unpublished.)

Ebihara, M., C. A. Mortland and J. Ledgerwood eds.

- 1994 *Cambodian Cultures since 1975*. Ithaca: Cornell University Press.

EFEO

- 2005 *Carte Archéologique du Cambodge*. (drawn by Bruno Bruguier). Paris:
EFEO.

English Heritage

- 1996 *Hadrian's Wall World Heritage Site: Management Plan*, July 1996.

- Evans, G.
 1990 *Lao Peasants under Socialism*. New Haven: Yale University Press.
- 1996 *The Politics of Ritual and Remembrance*. Chiang Mai (Thailand): Silkworm.
- Evans, G. ed.
 1999 *Laos: Culture and Society*. Chiang Mai (Thailand): Silkworm.
- Finot, M. L.
 1902 Vat Phou. *BEFEO*, II, 3. Pp. 241-245.
- Freeman, M.
 1996 *A Guide to Khmer Temples in Thailand & Laos*. Bangkok: River Books.
- Geertz, C.
 1963 *Agricultural Involution*. Berkeley: University of California Press.
 2000 *Local Knowledge*. Third Edition. Basic Books. (Originally published in 1983).
- Government of Lao PDR and UNESCO
 2001 *Champasak Heritage Management Plan*. Bangkok: UNESCO.
- Groslier, B. P.
 1979 La Cité Hydraulique Angkorienne: Exploitation ou Surexploitation du Sol ? *BEFEO*, LXVI.
- Hirsch, E. and M. O. Hanlon eds.
 1997 *Anthropology of Landscape*. Oxford: Clarendon Press.
- Holland, D., et al.
 1998 *Identity and Agency in Cultural Worlds*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Inda, J. X. and R. Rosaldo eds.

- 2002 *The Anthropology of Globalization*. Malden, Mass.: Blackwell.
- Jacob, J. M.
 1974 Pre-Angkor Cambodia: Evidence from the Inscription in Khmer concerning the Common People and their Environment. Smith, R. B. and W. Watson eds., *Early South East Asia*. Oxford: Oxford University Press. Pp.406-426.
- Jacques, C.
 1962 "Notes sur l'inscription de la stèle de Vat Luong Kau." *Journal Asiatique*, ccl (2), pp. 249-256.
 1986 Le Pays Khmer Avant Angkor. *Journal des Savants* 1986.
- Jeganathan, P.
 2004 « Checkpoint : Anthropology, Identity, and the State. » In Das. V. And D. Pooles eds., *Anthropology in the Margins of the State*. Santa Fe : School of American Research Press. Pp. 67-80.
- Kottak, C. P.
 1994 *Anthropology, 6th ed.* New York: McGraw-Hill, Inc.
- Lao National Tourism Administration(Planning and Cooperation Department Statistics Unit)
 2006 *2006 Statistical Report on Tourism in Laos*. Vientiane: Lao Tourism Authority, Lao PDR
- Leebouapao, L.,
 2006 *Lao PDR's Cross Border Economy: Case Study in Dansavanh, Savannakhet, and Houaysai/Tonpheung, Bokeo, Lao PDR*. Manila: Asian Development Bank.
- Lefèvre, E.
 1995 *Travels in Laos*. Bangkok: White Lotus. (Originally published as *Un Voyage au Laos*, Ed. Plon, Nourrit et Cie, Paris in1898).
- Levy, P.

1959a “Two Accounts of Travels in Laos in the 17th Century”. In Berval, R. de ed., *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie. Pp. 50-67..

1959b “The Sacrifice of the Buffalo and the Forest of the Weather in Vientiane”. In Berval, R. de ed., *Kingdom of Laos*. Saigon, Vietnam: France-Asie. Pp. 162-173.

Lewis, J. ed.

1992 *Minority Cultures of Laos*. Rancho Cordova, CA: Southeast Asia Community Resources Center.

Lintingre, P.

1974 A La Recherche du Sanctuaire Préangkorien de Vat Phou. *Revue Française d'histoire d'outre-mer*, no. 225.

Low, S. M. and D. Lawrence-Zúñiga eds.,

2003 *The Anthropology of Space and Place*. Oxford: Blackwell.

Kingdom of Cambodia

2005 *Statistical Yearbook 2005*. Phnom Penh: National Institute of Statistics, Ministry of Planning.

Marchal, H.

(出版年不明) *Le Temple de Vat Phou*. Saigon: Imprimerie Nouvelle d'Extreme-Orient-Saigon.

Ministry of Information and Culture, Lao PDR

1996 Ministerial Decree on the Nomination of the National Inter-Ministerial Co-Ordinating Committee for WATPHU. Ministry of Information and Culture Internal Document (N. 330/IC.)

Miura, K. (三浦 恵子)

2004 *Contested Heritage: Angkor Case*. Ph.D thesis (SOAS, University of London).

National Institute of Statistics, Ministry of Planning, Cambodia

2002 *General Population Census of Cambodia 1998. Final Census Result (2nd ed.)*

Nishimura, M. (西村 正雄)

1997 Mission Report I for Missions I, II, and III (August – December 1996). UNESCO-Laotian International Project for the Safeguarding of Wat Phu (Lao-UNESCO Wat Phu Project) (536/LAO/70). (Unpublished).

1998a Mission Report I for Mission IV (January – April 1997). UNESCO-Laotian International Project for the Safeguarding of Wat Phu (Lao-UNESCO Wat Phu Project) (536/LAO/70). (Unpublished).

1998b Conceptual Framework for a Strategy of Cultural Resource Management at Archaeological Sites: the Approach Developed at Vat Phu. Paper Presented at the IPPA Congress, Melaka., July 3, 1988.

1998c 『東南アジアの考古学』(共著)。東京:同成社。

2004a Representing “Vat Phou”- An Ethnographic Account of the Nomination Process of Vat Phou and Adjunct Archaeological Sites to the World Heritage List -. 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第49輯・第3分冊。Pp.29 - 63。

2004 b 「ラオス地域人類学研究所活動報告」。COE2004 年度報告書。早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター

2004 c 「ラオス、チャンパサックのランドスケープと記憶」。『文化人類学年報 - 特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学 - 文化遺産・記憶・地域文化 - 』第1巻(早稲田大学文学部)。Pp.21 - 30。

Nishimura, M. and P. Sikhaxay

1998 *Capacity Building in Cultural Heritage Management within the Context of Assistance for the Preservation of Wat Phu (536/LAO/70). Terminal Report (FIT/536/LAO/70) Submitted to UNESCO.*

Novellino, D.

- 2003 "From Seduction to Miscommunication: the Confession and Presentation of Local Knowledge in 'Participatory Development'". In Pottier, J., et al. eds., *Negotiating Local Knowledge*. London: Pluto Press. Pp. 273-297.
- Parmentier, H.
1914 Le Temple de Vat Phu. *BEFEO*, XIV, 2.
- Pichard, P.
1997 The Conservation of Vat Phu Temple. Assignment Report Submitted to UNESCO (FIT/536/LAO/70). (Unpublished).
- Pottier, J. A.
2003 "Negotiating Local Knowledge: An Introduction". In Pottier, J., et al. eds., *Negotiating Local Knowledge*. London: Pluto Press. Pp. 1-29.
- Pottier, J., A. Bicker and P. Sillitoe eds.
2003 *Negotiating Local Knowledge*. London: Pluto Press.
- Preusser, F. D.
1997 Wat Phu, Lao PDR Mission Report, Feb. 2 – 17, 1997. Project # 536/LAO/70 and 534/LAO/70 Submitted to UNESCO. (Unpublished).
- Ramos, M. J., A. Medeiros, P. Sena and G. Praça
2003 "Managing Natural Resources in Eastern Algarve, Portugal: An Assessment of the Policy Uses of Local Knowledge(s)". In Pottier, J., et al. eds., *Negotiating Local Knowledge*. London: Pluto Press. Pp. 155-170.
- Rawson, P.
1967 *The Art of Southeast Asia*. Singapore: Thames and Hudson.
- Rooney, D.
1994 *Angkor: An Introduction to the Temples*. Bangkok: Asia Books.
- Sikhanxay, P.

- 2004 Lao Government Policy toward Cultural Resource Management. 『文化人類学年報 - 特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学 - 文化遺産・記憶・地域文化 - 』第1巻（早稲田大学文学部） Pp.74 - 80.

Stewart, P. J. and A.Strathern

- 2003 Introduction. In Stewart, P. J. and A.Strathern eds., *Landscape, Memory and History*. London: Pluto Press. Pp. 1-15.

Stewart, P. J. and A.Strathern eds.

- 2003 *Landscape, Memory and History*. London: Pluto Press.

Stuart-Fox, M.

- 1997 *A History of Laos*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1998 *Historical Dictionary of Laos. 2nd Edition*. Lanham (UK): The Scarecrow Press.

Taillard, C.

- 1987 *Le Laos*. Montpellier: Groupement d'Intérêt Public RECLUS.

Tanabe, S. and C. F. Keyes eds.

- 1999 *Cultural Crisis and Social Memory*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Trankell, I. B.

- 1993 *On the Road in Laos*. Uppsala Research Reports in Cultural Anthropology, No. 12. Stockholm: Uppsala University.

UNESCO

- 1972 Convention of World Heritage. Paris: UNESCO.
- 1987 Project Document: Preservation of Wat Phu, Champassak. (LAO/86/006/A/01/13). (Unpublished).
- 1995 Capacity Building in Cultural Heritage Management within the Context of Assistance for the Preservation of Wat Phu (Wat Phu

ZEMP) (Revised Draft Project Document).

- 1996a Project Document: Capacity Building in Cultural Heritage Management Within the Context of Assistance for the Preservation of Wat Phu (Wat Phu ZEMP). (Unpublished).
- 1996b Mission Report to Laos PDR for project 536/LAO/70 (10 June to 19 June 1996). (Unpublished).
- 1996c Wat Phu ZEMP Project. Interim Report as of 18 November 1996. (Unpublished).

UNESCO/PROP

- 1996 UNESCO/PROAP Cultural Sector Priority Field Activities in Asia/Pacific 1996-1997. Document Distributed within UNESCO/PROAP. (Unpublished).

UNESCO/UNDP

- 1991 Preservation of Wat Phu, Champassak: Project Findings and Recommendations. UNDP/LAO/86/006 Terminal Report. (Unpublished).

Valderrama, F.

- 1995 *Histoire de l'UNESCO*. Paris: UNESCO

Wolters, O. W.

- 1974 "Khmer 'Hinduism' in the Seventh Century." Smith, R. B. and W. Watson eds., *Early South East Asia*. New York: Oxford University Press. Pp.427-442.

Yamashita, S. and J. S. Eades eds.

- 2003 *Globalization in Southeast Asia*. New York: Berghahn Books.

Young, C.

- 1997 The Management of the Wat Phu: Cultural Landscape. Mission Report Submitted to UNESCO.(Unpublished).

<日本語文献>

青柳 まちこ 編

2000 『開発の人類学』。東京：古今書院。

天川 直子 編

2004 『ラオスの市場経済化 - 現状と課題 - 』。東京：アジア経済研究所。

天川 直子、山田 紀彦 編

2005 『ラオス - 一党支配体制下の市場経済化』。東京：アジア経済研究所。

石田 正美 編

2005 『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所。

石田 正美

2005 「メコン河とメコン地域」。石田 正美編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.11-40。

院多本 華夫

2003 「村の暮らし」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.361-381。

大坪 聖子

2004 「ワット・プー遺跡の現状と課題」。『文化人類学年報 - 特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学 - 文化遺産・記憶・地域文化 - 』第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.68 - 73。

小笠原 高雪

2005 「メコン地域における開発協力と国際関係」。石田 正美編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.41-62。

小田島 理絵

2004 「稲作、自給自足、家族と親族 - ラオ人農民の日常的実践と記憶に関する

ー考察：1950年代から1975年を中心として」。『文化人類学年報 - 特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学 - 文化遺産・記憶・地域文化 - 』第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.31-43。

神澤 隆

2003 「観光資源と開発」。西澤 信善、古川 久継、木内 行雄 編、『ラオスの開発と国際協力』。東京：めこん、所収。Pp.256-270。

カムボーン・ティーラプット（竹原 茂 訳）

2003 「南部ラオス」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.71-92。

カムペーン・ティップムンタリー（竹原 茂 訳）

2003 「ラオス・中国国境」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.475-491。

川田 順造、福井 勝義 編

1988 『民族とは何か』。東京：岩波書店。

菊池 陽子

2003 「現代の歴史」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.149-170。

小山 昌久

2005 「ラオスの社会・経済概況と人材開発問題」。石田 正美編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.115-137。

砂井 紫里

2004 「日常食事と食べ物の記憶」。『文化人類学年報 - 特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学 - 文化遺産・記憶・地域文化 - 』第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.44 - 53。

サイ・パカスム（竹原 茂 訳）

2003 「運輸・通信」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.397-424。

嶋尾 かの子

- 2004 「ワット・プー地域における音楽文化とその現状」。『文化人類学年報 - 特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学 - 文化遺産・記憶・地域文化 - 』第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.54-67。

上東 輝夫

- 1990 『ラオスの歴史』。東京：同文館。

瀬戸 裕之

- 2003 「政治」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.93-124。

- 2004 「ラオスの中央・地方関係における県党・行政権力の役割 - ビエンチャン県における計画管理及び人事管理を事例に - 」。天川 直子編、『ラオスの市場経済化 - 現状と課題 - 』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.55-97。

初鹿野 直美

- 2005 「カンボジアの産業の現状 - 縫製業を中心として」。石田 正美編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.168-191。

廣畑 伸雄、竹内 潤子

- 2005 「カンボジアの人的資源開発 - 現状と課題」。石田 正美編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.90 - 114。

ブアトーン・プーンサリット（竹原 茂 訳）

- 2003 「森林資源」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.383-396。

フンパン・ラタナヴォン（竹原 茂 訳）

- 2003 「まえがき」。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.9-29。

西澤 信善、古川 久継、木内 行雄 編

2003 『ラオスの開発と国際協力』。東京：めこん。

西澤 信善

2003 「ラオスのプロフィール」。西澤 信善、古川 久継、木内 行雄 編、
『ラオスの開発と国際協力』。東京：めこん、所収。Pp.13-32。

日本政策投資銀行メコン経済研究会 編著

2005 『メコン流域国の経済発展戦略』。東京：日本評論社。

ラオス文化研究所 編

2003 『ラオス概説』。東京：めこん。

山田 七絵

2005 「ラオスの木材加工産業 - 持続的な発展の可能性」。石田 正美編 『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.192 217。

山田 紀彦

2004 「チンタナカーン・マイ政策の展開と党・政府人事の変遷」。天川 直子編、『ラオスの市場経済化 - 現状と課題 - 』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.11 54。

吉田 恒昭、金 広文

2005 「メコン地域の交通インフラ」。石田 正美編 『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.66-88。

<プロフィール用原稿>

西村 正雄

1950年東京生まれ。

(学歴)

早稲田大学第一文学部卒業。

東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。

ミシガン大学人類学部大学院Ph.Dプログラム入学。

1992年Ph.D.(ミシガン大学)取得。

(職歴)

ミシガン大学人類学博物館研究助手

ミシガン大学人類学博物館研究員(ポストドク・リサーチアソシエイト)

フィリピン、セブ市、サンカルロス大学客員教授

フィリピン、国立博物館客員研究員

カンボジア、王立プノンペン芸術大学客員教授(ユネスコ客員教授)(1994 - 1997)

ユネスコ研究員(ラオス、チャンパサック世界遺産に伴う調査)(1996 - 2002)

早稲田大学文学部助教授(1997)

早稲田大学文学学術院教授(2002 - 現在)

(主な著書・論文)

『国家の形成』(共著)(三一書房)、『東南アジアの考古学』(共著)(同成社)、「遺産をめぐる様々な意見」(『地域文化学』(雄山閣)所収)、「ラオスとその周辺地域における人類学的研究」、「ラオス、チャンパサックのランドスケープと記憶」(『文化人類学』第1巻)、「チャンパサックの集合的記憶と分有」(『文化人類学』第2巻)、「「遺産」概念の再検討」(『文化人類学研究』第7巻)、Champasak Heritage Management Plan(分担執筆)(UNESCO)、Representing “Vat Phou”(早稲田大学大学院文学研究科紀要 49:3:49-63)など。

(主なフィールド)

1) フィリピン、ネグロス・オリエンタル

2) フィリピン、セブ島、セブ市

3) カンボジア、カンダール、タケオ、シエムリ・アップ、ストウン・トレン、プレア・ヴィヒール

4) ラオス、チャンパサック県